広島・宮島を舞台にしたアートプロジェクト「MAFIN 2026」企画詳細のお知らせ

テーマ「時の目」のもと、参加アーティスト4組が決定。 冥丁による奉納演奏も同時開催。

広島・宮島の大聖院を舞台に開催されるアートプロジェクト「MAFIN 2026（Miyajima Art Festival in the Narrative　2026）」（会期：2026年11月20日～12月13日）は、このたび、**本展のテーマ「時の目」、参加アーティスト４組（Chim↑Pom from Smappa!Group、金沢寿美、久保寛子、イェラシェビッチ・イリヤ）が決定**しましたのでお知らせします。

島そのものが信仰対象である宮島の霊峰・弥山で1200年灯り続ける「消えずの火」は、広島平和記念公園「平和の灯」の火種でもあります。形を持たず変化し続ける火のように、ダイナミックな時間軸を捉え直しアートを介して平和や祈りを再考する試みとして、広島にゆかりを持つ表現者や企画者たちによって、被爆80年を迎えた2025年に本プロジェクトは始動しました。

初回の2025年では、宮島に重なる長い時間から、「自然の循環や生死のサイクルにはじまりと終わりはない」という視座を提示しました。2026年は、そうした時間の蓄積と、幾重にも折りたたまれてきた人々の祈りを背景に、「時の目」をテーマに掲げます。情報が繁茂し即答が求められる現代において「答えのない問いの前に立ち止まる時間＝祈り」の意味を問い直し、1200年の祈りが重なる宮島という特別な地に、新たな現代アートの実践の場を創出します。

また、同時期に開催するイベントとして、冥丁による特別公演「奉納演奏　於　大聖院　観音堂」の実施が決定しました。

「MAFIN 2026」開催概要

名称　MAFIN 2026（Miyajima Art Festival in the Narrative 2026）

テーマ　時の目ー普遍的で、久遠の、平和のためのプロセス

会期　2026年11月20日（金）ー12月13日（日）　**開場時間**　10:00~17:00

※ **プレス内覧会**　11月19日（木）に実施します。詳細は10月中旬に改めてお知らせします。

参加アーティスト　Chim↑Pom from Smappa!Group、金沢 寿美、久保 寛子、イェラシェビッチ・イリヤ

会場　宮島弥山大本山 大聖院

※ Chim↑Pom from Smappa!Group作品展示会場の客殿は、11月22日（日）・12月1日（火）は観覧不可です。ご来場の際はご留意ください。

観覧料　無料

主催　宮島芸術祭実行委員会

後援　一般社団法人宮島観光協会、世界遺産登録30周年記念事業実行委員会

協賛　株式会社ジーン

協力　宮島口みらい協議会、アウラ現代藝術振興財団、紀南アートウィーク

公式WEBサイト　https://mafin.jp/

同時開催イベント｜宮島芸術祭実行委員会主催 特別公演　冥丁「奉納演奏 於 大聖院 観音堂」開催概要

開催日時　2026年11月22日（日）19:30-20:30

出演　冥丁

会場　宮島弥山大本山 大聖院 観音堂

チケット　A席：8,000円、B席：7,000円、C席：5,000円（Peatix https://miyajima-meitei.peatix.com にて販売）

主催　宮島芸術祭実行委員会

①「MAFIN 2026」プロジェクトタイトル

MAFIN 2026｜時の目
普遍的で、久遠の、平和のためのプロセス

②「MAFIN 2026」コンセプト

島そのものが信仰の対象とされてきた宮島。その霊峰・弥山にある大聖院では、空海の時代から約1200年にわたり、絶やすことなく受け継がれてきた「消えずの火」が灯り続けています。長い時間と、人々の祈りが幾重にも折りたたまれていると同時に、広島平和記念公園の「平和の灯火（ともしび）」へとつながる火種でもあります。形を持たず、燃えるものがなければ消え、絶えず揺らぎながら燃え続ける火。そのありようは、「無常」や「流動性」を孕んだ「変化し続ける存在」ともいえます。過去から現在へ、そして未来へと受け渡されていくその火は、現在のなかに遠い過去をひらく、ひとつの「時の目」のようにも思えてきます。

情報が繁茂し、あらゆる問いにすぐ答えを得ることのできるいま、私たちはかえって、わからないものの前に立ち止まることが難しくなっているのかもしれません。簡単には孤独になれず、それでいて孤立することは容易となる時代。技術の発達は、私たちに豊かな生活を与えてくれる一方で、農耕や狩猟といった身体的な「つくる力」を剥奪し、待つこと、退屈すること、他者や環境と関わりながら自分の時間や生活をつくっていくための「生きる力」を失わせ、そしていま「考える力」さえも奪おうとしています。

AIによって「考えること」が効率化されようとする時代に、「祈る」という行為は、答えを得るためではなく、考えること以前の、世界に対して立ち止まる時間を取り戻す行為なのではないでしょうか。芸術もまた、効率やわかりやすい回答によって回収することのできない時間を、私たちにもたらします。

1200年にわたり火が灯り続け、幾重もの祈りが重なる大聖院という場所で、作品を通して想像力を働かせること。芸術によって、あたらしい経験に突き出されること。思考という茫洋の海に投げ出されてみること。数多ある答えの出ない問いと、その問いにとどまる時間の意味を再考し、平和を希求しつづけるプロセスのなかに、人間のあり方を見つめ直していきます。

　複雑な歴史的背景をもつベラルーシ出身で、異文化的視座からの日本画という手法で周縁化された人々の社会的事象を現前化するイリヤ・イェラシェビッチ。
　自身のルーツを起点とし、新聞紙を用い、鉛筆で黒く塗りつぶした紙面から文字や写真を表出させ、個人を越え、人類全体に関わる社会的課題を浮き彫りにする作品で知られる金沢寿美。
　農や先史時代の芸術、民俗学的学説を参照しながらブルーシートなどの工業製品を使用し、自然の脅威や、周縁化された女性像を現代的に再考する、広島出身の彫刻家・久保寛子。
　広島に寄せられる折り鶴を題材に作品を制作し、2014年には宮島・大聖院で大量の折り鶴のお焚き上げを行うなど、広島との関わりを重ねてきたChim↑Pom from Smappa!Group。

宮島行きのフェリーに乗ると、白い波が湧き立ち、細かく揺れては後に流されていく。島へ渡るその時間もまた、日常から離れ、異なる時間へと身を移していくひとつのプロセスなのかもしれません。こういった刹那的な時間の流れにも目を向けながら、大聖院という場と作品を通じ、いま生きることを考える。答えのない時間を逡巡する機会を提示します。

戸塚 愛美（MAFIN2026 キュレーター）

③ 「MAFIN 2026 」展示作品・参加アーティストプロフィール

Chim↑Pom from Smappa!Group

《よい火、わるい火、ふつうの火》

大聖院で1200年にわたり保たれてきた「消えずの火」、広島の原爆の残り火である「平和の火」、そして特に文脈をもたずに灯された火。一見すると同じに見える火は、歴史や信仰、場所や見る人の立場によって異なる意味を帯びることを問いかけます。生活における欠かせなさや祈り、記憶、破壊や継承などが併存する火の多義性を、大聖院という場所から考えます。



「広島!!!!!展」旧日本銀行広島支店、2013
Photo 森田兼次、Courtesy of the artist.



Photo: Seiha Yamaguchi

2005年に東京で結成されたアーティスト・コレクティブ。
現代社会に介入したプロジェクトを通して世界各地の展覧会に参加し、その他にもさまざまな自主企画を展開している。
主な個展は森美術館（東京）、Dallas Contemporary（アメリカ）、MoMA PS1（アメリカ）、Saatchi Gallery（イギリス）などで開催。広島では個展「広島!!!!!展」旧日本銀行広島支店（2013年）がある。
また、福島第1原発事故に伴う帰還困難区域内で2015年から続いている展覧会「Don't Follow the Wind」の発案と参加や、アーティスト・ラン・スペース「Garter」、ユーモラスでナンセンスな「商品」や「作品」を販売することで使用価値の概念を問いかけるポップアップ・ショップ「KANE-ZANMAI」など、さまざまな自主プロジェクトを立ち上げてきた。メンバー個人でもスペースやコミュニティの運営、出版等を手掛けている。

金沢 寿美｜Sumi Kanazawa

《宙と空》

「祈りにも似た気持ち」で日々筆を運ぶ金沢寿美は、個の唯一無二性と集団の断片であることの矛盾を問い続けてきました。本展では、新聞紙を黒鉛で塗りつぶすライフワーク「新聞紙のドローイング」約100枚によるインスタレーションと、2019年以降、毎年8月6日から10日の間にだけ描いている、原爆をテーマとした新たなドローイング作品を展示します。



《新聞紙のドローイング》
展示風景：「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」森美術館（東京）2022年
撮影：来田 猛、画像提供：森美術館



Photo: Shintaro Abe

1979 年兵庫県生まれ、韓国籍。
金沢はこれまで作品を通して、人間の「個人は唯一無二の存在である一方、集団の一部に過ぎない」という永遠の矛盾について問い続けてきた。彼女の作品は、個と集団、その両者を行き来するようにして生まれる“間にある世界”を壮大なインスタレーションによって表現している。
近年の主な展覧会に、「We, such fragile beings」PODO Museum（2025-2026年、韓国）、「FATHOM-塩田千春、金沢寿美、ソー・ソウエン」京都精華大学ギャラリーTerra-S（2023年）、個展「Erase and See」大和日英基金大和ジャパンハウス（2023年、イギリス）、「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」森美術館（2022年、東京）。現在、Bangkok Art Biennale 2026に参加し作品を展示中。

久保 寛子｜Hiroko Kubo

《森の目》

地域に伝わる神話や伝承、農や先史時代の芸術、民俗学的学説などを参照しながら、ブルーシートや防風ネット、鉄などの工業製品を用いて彫刻作品を制作する久保寛子。本展では、複数の瞳を配した《森の目》（2024年）を大聖院に展開します。南方熊楠による知の探究にも着想を得た本作を、大聖院を取り巻く環境との関係のなかで提示します。



《森の目》2024　Photo：下田学



1987年広島県生まれ、千葉県在住。
広島市立大学芸術学部彫刻専攻卒業、テキサスクリスチャン大学美術修士課程修了。
民俗芸術や文化人類学のリサーチを背景に、ワイヤーメッシュ、ブルーシート、防風ネット、鉄など身近な工業製品を用いた彫刻作品を制作している。神話や祈りから生まれた偶像、自然の脅威や遺物の破壊と再生、周縁化されてきた女性の表象などを手がかりに、暮らしの中に宿る美や信仰を現代的な視点から捉え直す。
主な個展に「鉄骨のゴッデス」ポーラ　ミュージアム　アネックス（2024年、東京）。「瀬戸内国際芸術祭2016」、「さいたま国際芸術祭2020」、国際芸術祭「あいち2025」などに参加。広島文化新人賞（2022年）、六甲ミーツ・アート公募大賞（2017年）受賞。KAMU　KANAZAWA、おおさか創造千島財団、株式会社IZAKなどに収蔵。
2017年より広島で「オルタナティブスペースコア」を運営。

イェラシェビッチ・イリヤ｜Ilya Yerashevich

《漂う光》
ベラルーシ出身のイェラシェビッチ・イリヤは、日本画の技法や素材を取り入れながら、環境、ジェンダー、人権、高齢化など、現代社会における文化的・社会的課題を主題に制作しています。金箔の人物像は精神や記憶を象徴し、キリスト教のイコンと仏教彫刻を参照しています。人型が取り外された後の空白は、失われた人の痕跡を示し、時間や記憶、不在を表します。



《re-main》 2023, Studio view



ベラルーシ生まれ、東京を拠点に活動。
チェコ共和国のマサリク大学で美術教育を学び、学士号を取得。在学中には国立台湾大学に留学し、美術史を学ぶ。その後、マサリク大学およびオストラヴァ大学の修士課程で、視覚芸術、美術教育、版画を学ぶ。韓国・成均館大学校への留学のほか、台湾やベラルーシにて滞在制作を行う。2019年、文部科学省奨学金を得て来日。東京藝術大学で日本画の技法や素材、表現について探究し、2023年に同大学大学院美術研究科日本画専攻を修了。その後、国際芸術創造研究科博士後期課程満期退学。
伝統と現代の交差を軸に、日本画の技法や素材を取り入れながら、絵画、インスタレーション、パフォーマンスなど複数のメディアを横断して制作している。環境、ジェンダー、人権、高齢化、飲酒文化など、現代社会における文化的・社会的課題を主題とし、伝統的な表現を構成する素材、形式、主題の境界を問い直している。

④ MAFIN（Miyajima Art Festival in the Narrative）とは

MAFINとは、広島県廿日市市宮島を舞台としたアートプロジェクトです。1200年の歴史を有する宮島の寺院・大聖院を起点とし、背景にある歴史や記憶、人々の営みを「ナラティブ（語り／物語）」として捉え直し、広島の歴史や文化を継ぎ、紡いでいくための表現を生み出していきます。神の島と呼ばれ、長く聖域として敬われている宮島。被爆80年の節目に実践をはじめ、大聖院のダイナミックな時間軸を捉え直し、アートを介して、普遍的な平和の希求・祈りのあり方を再考していくことを目指します。

「MAFIN2026」企画・制作

キュレーション：戸塚 愛美
デザイン：林 琢真
プロジェクトマネージャー：冠 那菜奈（Tiarart.com）
パートナーシップディレクター：濱田 佳資
コーディネーター：松波 静香
広報：有田 泰子（Early Edition）、小田 鮎子

主催　宮島芸術祭実行委員会
委員長：イタイ ミナコ

お問い合わせ先

宮島芸術祭実行委員会事務局　contact@mafin.jp

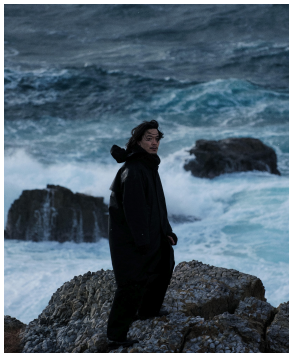
---

⑤ 同時開催イベント・特別公演（宮島芸術祭実行委員会主催）

冥丁「奉納演奏 於 大聖院 観音堂」

広島・尾道出身のアーティスト、冥丁。弘法大師・空海が焚いたと伝えられる「消えずの火」と、1200年にわたり祈りが重ねられてきた宮島の歴史を背景に、宮島芸術祭実行委員会主催の特別公演として、大聖院　観音堂にて、この地に音を捧げます。

開催日時　2026年11月22日（日）19:30-20:30
会場　宮島弥山大本山 大聖院 観音堂
チケット　A席：8,000円、B席：7,000円、C席：5,000円
購入方法　Peatix（https://miyajima-meitei.peatix.com）にて販売
主催　宮島芸術祭実行委員会
問い合わせ先　宮島芸術祭実行委員会事務局　contact@mafin.jp



冥丁は、“自明でありながらも幽微な存在として漂う日本”を「失日本」と名付け、日本を主題とした独自の音楽表現を展開する、広島・尾道出身、京都在住のアーティストである。
現代的なサウンドテクニックと日本古来の印象を融合させた、私的でコンセプチュアルな音楽表現を特徴とする。『怪談』『小町』『古風（Part I, II, III）』からなる三部作シリーズを発表し、その独自性は国際的に高く評価されている。The　WireやPitchforkなどの海外音楽メディアからも注目を集め、近年のエレクトロニック・ミュージックにおける特異な存在として確立された。近年は、寺院や文化財、歴史的建造物といった空間へと表現の場を拡げ、日本的感性と現代的表現の新時代を見いだし続けている。2026年には世界遺産・音羽山　清水寺にて奉納演奏を実施し、同年4月、広島での10年間の活動の集大成ともいえるアルバム『瑪瑙』を発表した。